

James D. McCawleyの統語分析（8）

—統語範疇を検討する—

上野 義雄¹

はじめに

本稿では、McCawley 1988/98のChapter Seven Syntactic CategoriesにおけるJimの統語範疇 (syntactic categories) の扱い方を検討する。前稿と同様に、かっこ付きの数字[...]はMcCawley 1998の該当ページを示す。この章の内容の要点はMcCawley 1993 : 16-7, 561 notes 14, 15にまとまっている。

なお、この章の内容の土台となっていて、これ以前に書かれた統語範疇に関するJimの論考としては、“The Nonexistence of Syntactic Categories” (McCawley 1982 : 176-203) (初出1977) が知られている。この論文のタイトルの意図は、当時のJimにとっては「統語範疇 (syntactic categories)」とは統語現象 (syntactic phenomena) に関わるさまざまな要因 (必ずしも統語的とは限らない) の集まりに便宜的につけた名称にすぎず、統語範疇自体が固有で固定的な独立した存在ではないという点にあった。次はMcCawley 1982からの引用。

“I develop an alternative approach in which the notion of syntactic category as such is rejected in favor of the recognition of a set of factors, some of which are not syntactic in nature, that can play roles in various

¹白鷗大学教育学部
e-mail : yueno@waseda.jp

kinds of syntactic phenomena. The resulting conception of syntax is shown to provide the basis for a picture of language acquisition that is far less mysterious than the picture generally assumed in transformational grammar.” (p.5)

“...in this view, syntactic category names will be merely informal abbreviations for combinations of these factors.” (p.185)

“...syntactic categories have no independent existence...” (p.200)

Jimは、Chapter Seven Syntactic Categoriesにおいて統語範疇を吟味し、a節で統語範疇決定に影響を及ぼすさまざまな要因について、b節で「補文標識 (complementizer, Comp)」を含む個々の統語範疇について、c節で派生に伴う tree pruningの問題について論じた。

第1節 統語範疇決定要因

Jimは語や句の統語範疇決定に影響を及ぼす要因として次の4つを挙げた[13, 187-92]。第一の要因は、句(構成素)の主要部(head)の品詞(part of speech, word class)である[187]。ただし、特定の品詞(語彙範疇)に属さない主要部(たとえばテンス)とそれが成す句を、Jimはそれぞれ0, 0'と表記した([223], McCawley 1982 : 6, 189)。第二の要因は、語なのかその語を主要部とした句なのかの違い、すなわち、語レベル(word-level)対句レベル(phrase-level)の違いである[187]。第三の要因は、NPやDet、S、Comp'などの統語範疇について、それを意味的(semantic)、内統語的(internal syntactic)、2種類の外統語的(external syntactic)な観点から見て、プロトタイプの範疇(fuzzy category)としてその統語範疇らしさの程度を捉えるという見方である([192], McCawley 1982 : 177, 197-8, 203 note 16)。第四の要因は形態論である。語がどのように屈折変化をするかはその語の品詞決定に大きな手掛かりとなる[120, 187]。特に言語習得過程では、Jimはどのように語が屈折するかはその語の品詞習得の十分条件になると考えていた(McCawley 1982 : 182)。

Jimは統語範疇をこれらさまざまな要因の集まりと捉えていたので ([187], McCawley 1982 : 5, 185)、派生の途中で当該の語や句がこれらの要因の点で変化が生じれば、派生の途中でその統語範疇が変わることを認めていた ([202, 203], McCawley 1982 : 184)。つまり、表層構造に現れている統語範疇は、深層構造でもその統語範疇のままに現れていたという保証はないことになる。また、派生の途中で挿入される語についても [202]、挿入時点での外統語的 (shallow-oriented external syntactic) な性質に合わせた統語範疇が付与され、しかもその統語範疇に合う surface combinatoric rule (SCR) を満たさなければならないと考える。(たとえば、派生の途中で挿入されたofは前置詞 (P) であり、表層構造ではPの主要部となる。) 従来の生成文法では、語は統語構造 (深層構造) に導入される時点でその統語範疇が確定されていて、派生過程でその範疇が変わることはなく、また、派生過程で挿入される語についてはその統語範疇が付与されないとされていた (McCawley 1982 : 181, 183, 185)。

派生過程で統語範疇が変更になったり挿入されたり削除されたりする例としては次のようなものがある。

- Tense Replacementにより非定形の環境で₀ Past]が_v have]となり、この主要部の範疇変更に伴ってそれが成す句もO'からV'へと変更になる。またこれと双対的に、Tense Replacementにより非定形の環境で₀ Pres]が削除されて表層構造に現れて来ない。つまり、深層構造に存在していても表層構造に現れて来ない範疇も存在する。前者の例のように深層構造の範疇が表層構造で異なった統語範疇として現れる例としては、深層構造に存在する₀ Pres]や₀ Past] (まとめて₀ T]と表記) が循環後変形のdo-supportにより表層構造でdoの屈折変化形_v do/does]や_v did]として、またATやTHにより動詞や助動詞の現在形・過去形として現れる場合がある。一方、後者の例としては、深層構造に存在するPがその補部がComp'の場合には削除されて表層構造に現れて来ない場合や、深層構造に存在する_{Comp} that/for]が派生途中で削除されて表層構造に現れて来

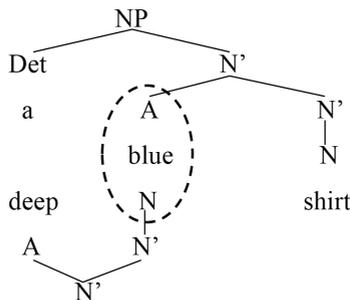
ない場合がある。なお、主要部が削除された場合に、それに伴ってその句節点も削除されるのかどうかは吟味が必要である。

- Jimは、テンスなどのどの品詞にも属さない語彙範疇 (lexical category) を0で表し、それが主要部として成す句を0'と表記した (McCawley 1982 : 189, 190, [xxii, 223])。この場合には派生過程で品詞が決まった時点で0からその品詞へと変更が起こる。たとえば、McCawley 1982 : 189では、John is fond of MaryとJohn likes Maryの2文について、もし完全に同義であると仮定した場合には共通の深層構造を持ち、そこでは品詞指定の無い2項述語[₀ FOND]が存在している。[_A fond]を含む前者の派生過程では、fondの語彙挿入により形容詞に品詞が確定した時点で、0と0'はそれぞれAとA'に変更になり、前置詞ofとbe動詞の挿入を受ける。一方、後者の場合にはlikeの語彙挿入により動詞に品詞が確定し、0と0'はそれぞれVとV'に変更される。また、Jimは0と0'を言語習得過程の説明にも使った (McCawley 1982 : 196)。動詞 (や前置詞) が後ろにNPを従えて句を成すということは習得したが、まだ動詞 (や前置詞) という語彙範疇は習得していない段階では、[_{0'} 0 NP]という表層構造を学んだことになる。
- Relative Clause Reductionの結果である所有を表す[_V having]が[_P with]に変わり、この主要部の範疇変更に伴ってV'がP'となる[203]。
- Jimの名詞化 (the downwards version of nominalization) の分析によれば[410-2]、深層構造で意味的な要素として存在する[_N ACTION] (つまり、動詞から行為名詞を派生する派生接辞の表す意味) が、たとえばその補文の動詞[_V choose]に降りて行き[_N [_V choose] [_N ACTION]]と一体化して、表層構造では[_N choice]として現れる。これは、(深層構造の[₀ T]が定形節においてATやTHにより動詞と一体化して[_V V-₀ T])として現れる場合と同様に) 深層構造における意味的な要素が表層構造に現れる語に取り込まれてしまう例である。また、この名詞化変形に伴って、深層構造に設定した補文SとそのV'は (Sの主要部の動詞が派生名

詞に変わるので) N'に変更になる。

- there構文では、深層構造におけるQ'の主要部Qであるexistential quantifierがthere挿入によりthereとして主語NPの位置に現れる[635]。
- Be動詞の一部の用法(たとえば、形容詞述語文)では、be動詞は派生途中で動詞として挿入される[141-2]。また、他動詞の名詞化に伴って深層構造における補文内の主語や目的語NPの前にofやbyなどの前置詞が(SCR $[_{N'} N' P']$, $[_{N'} N' P']$ を満たすために)挿入される[417]。このような場合には深層構造に存在しない範疇が表層構造に現れる。

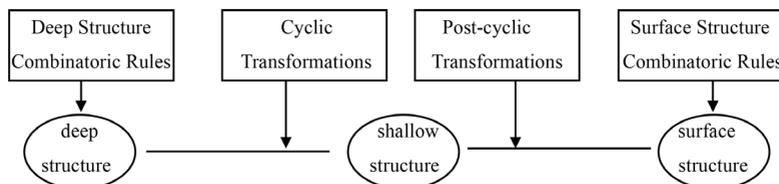
また、Jimは表層構造内で一つの語が複数の統語範疇に属する可能性を認めていた[204, 767-8]。たとえば、a deep blue shirtというNPでは、blueは同時に形容詞でも名詞でもある。つまり、deep blueでは $[_{N'} [_A deep] [_{N'} blue]]$ となっており、同時にblue shirtでも $[_{N'} [_A blue] [_{N'} shirt]]$ となっている。Jimはこの状況を2つの樹形図に分けて表示したが[768]、2つの統語構造を同時に表示した方がこの状況をより良く捉えることができる。丸で囲んだ部分が2つの品詞を持つ語で、単一節点を成している。この上下の樹形図は、 $[_{NP} Det N']$, $[_{N'} A N']$, $[_{N'} N]$ という3つの局所句樹形図(local tree)から構成されていて、1つの語blueにAとNの2つの品詞が付与されている点を除けば、それぞれはwell-formedである。



しかも、この $[_{NP} a deep blue shirt]$ を名詞shirtの前に形容詞が2つ(deepとblue)付いた構造(すなわち、 $[_{NP} a [_{N'} deep [_{N'} blue [_{N'} shirt]]]]$)と分

析することはできない。[_{NP} a deep blue shirt]では、形容詞deepは名詞blueを修飾しているからである。

これらの例から分かるように、深層構造における範疇とその範疇の結合のし方は、表層構造における範疇とその結合のし方とは異なっていることがある。Jimは、前者を捉えるためにDeep Structure Combinatoric Rules (DCR) を、また、後者を捉えるためにSurface Structure Combinatoric Rules (SCR) を設定した (McCawley 1982 : 195, [56, 174, 314-5])。したがって、派生 (derivation) とはDCRを満たす深層構造 (“syntactic deep structure” [20]) からスタートして、様々な循環変形 (cyclic transformations) が厳密循環適用原則 (the principle of strict cyclicity) [170] に従って適用されて前表層構造 (shallow structure) に至り、最後に循環後変形 (postcyclic transformations) が適用されてSCRを満たす表層構造に至る過程である。Jimはこの状況を次のような図で示している [56, 174]。

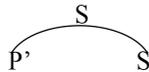


Emonds 1970, 1976は「構造保持の原則 (Structure Preserving Principle)」を提案し、この原則のために個々の変形は深層構造でもともと許される構造だけが出力となるように適用されると主張した。しかし、Jimによれば、そもそも変形はSCRを満たすように適用されることになる [311-2]。つまり、Emondsが発見した変形の「構造保持」の性質は、変形に課せられている「原則」の存在を示しているのではなく、well-formedな表層構造を規定しているSCRの存在を示しているというのがJimの主張であった ([311-2], McCawley 1982 : 112 note 9, 193, 195)。(たとえば、受動化変形では深層構造の他動詞目的語が目的語NPの位置から主語NPの

位置に移動するが、これは表層構造にSCR [_S NP V']が設定されており、これに合わせるためである。) Jimの場合には、深層構造は意味・論理構造にもっとも近い統語構造なので、深層構造で意味を担わない空き家のNP節点を用意しておき、その空き家にたとえば目的語NPや補文内の主語NPが移動する(これにより「構造保持原則」が満たされるのだが)というような(受動化や非対格動詞、主語への繰り上げの)分析は不可能である点に注意。

悔やまれることは、JimはSCRのリストを[315]に挙げたが、このリストはいろいろな意味で不完全である。また、DCRのリストについては、残念ながらもまったく挙げられていない。おそらくは、[_S Q' S]や[_S NP 0]、[₀ 0]、[_{N'} N NP]などがDSCのリストに含まれることになったと思われる。

もうひとつ悔やまれることは、SCRのリストの中で、binary branchingで2要素間に順序が指定されていない場合(“unspecified order”)の記号として円弧を使うことを、Jimは提案していた[315]。たとえば、文修飾(ad-S)のP'と修飾されるべきSとの間に順序が指定されていない状況を次のように円弧を用いて表した。



Jimにとっての深層構造は本質的には意味・論理構造である(McCawley 1982: 185)。深層構造には意味的構成素(semantic constituent)が存在するだけで、その要素間の順序は指定されていないと考えられる(McCawley 1982: 7, [411])。もしそうであるならば、深層構造では構成素を表すのに円弧記号を使い、順次循環変形がかかり表層構造に近づくにつれて順序が指定されていくので、順序が決まった時点で円弧記号から通常の線分表記に変えるという方針を採用すれば、派生が進むにつれて要素間の順序が定まっていく過程が捉えられて、より精密な派生過程が描けたはずである。

上述の第二要因である語レベル対句レベルについては、Jimは語レベルの範疇Xに対してそれを主要部とした句レベルをX'で表した。つまり、Jim流のX-bar syntaxでは、single bar (single prime) が最大投射ということになる (McCawley 1982 : 187)。したがって、動詞句 (verb phrase) はV'、形容詞句 (adjective phrase) はA'、副詞句 (adverb phrase) はAdv'、前置詞句 (preposition phrase) はP'である。また、同様な意味で名詞句 (noun phrase) はN'である。[212] note 7やMcCawley 1993 : 561 note 15を参照。

動詞句がV'である点に関連して、主流派生成文法では、動詞句はVP (= V'') であり、その指定部に主語NPが存在するといういわゆる「VP内主語仮説」が採られている。この結果、時制が実質的に繰り上げ述語として機能する (つまり、VP内の主語が時制の指定部に移動する)。Jimの場合には、生成意味論 (generative semantics) の分析に従って (たとえば、McCawley 1973/76 : 259 (初出は1969) を参照) 動詞が構成する節 (S) の外側に時制が存在していて、動詞の主語NPは主語繰り上げを受けるという分析になるので、結果的にVP内主語仮説を先取りした分析になっていると筆者は考えている。

JimにとってのNPとSは次節で述べるように、X-bar syntaxには従っていない。つまり、NPやSには主要部がなく、したがって、NPはNの最大投射ではなく (McCawley 1982 : 187)、SはVなどの最大投射ではないとJimは考えていた。(ただし、例外的に[15] (8) ではSの主要部がVになっている。) NPとSは、Jimの考えでは、意味的 (semantic)、内統語的 (internal syntactic)、外統語的 (external syntactic) な要因から決まるfuzzy categoryであると捉えた。したがって、さまざまな程度のNP-hoodやS-hoodを示すものが存在する。たとえば、JimはSCR [_{NP} Comp']を認めていたが[315]、これはComp'が主語や目的語など意味的に述語の項 (argument) の位置を占め、外統語的に[_S NP V']や[_{V'} V NP]のNP位置に現れるので、(内統語的には典型的名詞句に該当しないが) Comp'をNPとして認めていたとい

うことである。

Jim流のX-bar syntaxでは、修飾語（統語的にはadjunct）が語や句、節を修飾する場合には、その当該節点にその修飾語（M）が付加されるという付加構造（ $[_X M X]$ ）を成し、その主要部（X）の範疇は変わらずにただ単に一回り大きくなるだけである（McCawley 1982 : 188, [190]）。たとえば、 $[_V [_{Adv} often] [_V visit Tokyo]]$ 、 $[_P [_{Adv} right] [_P on time]]$ 、 $[_N [_A hard-working] [_N student of linguistics]]$ 、 $[_S [_P When I was young] [_S I learned German]]$ などである。

第2節 個々の統語範疇の検討

Jimが[194-202]で個々の統語範疇を吟味しているので、そこでのJimの考察を筆者のコメントを交えつつ紹介する。なお、Compについては[199-201]と上野2023aを参照。

2.1 NPについて

JimはNPをfuzzy categoryとして認め（つまり、範疇内のメンバーをcoreからperipheryまで認め）、もっとも典型的なNPは意味的に項であり、内統語的に $[_{NP} Det N']$ の形で、外統語的に項位置（argument position）を占めるものであるとした（[212] note 11）。実際、Jimはつぎの下線部をfuzzy categoryとしてのNPに含めた（McCawley 1993 : 561 note 14）。

(1) fuzzy categoryとしてのNPの例（下線部） [191]

- a. A portrait of the queen hung on the wall.
- b. He climbed the stairs.
- c. There were some disagreements.
- d. That Smith will be elected is unlikely.

さまざまな構成素のNPらしさ（JimのことばではNP-hood）を測るた

めに、Jimは4つの基準を提示した[192]。そのうちの一つである“deep-oriented external syntactic”の定義は次の通りである。“An item is a NP in (deep-oriented) external syntax (or is a NP “by inheritance”) if either (a) it is a logical argument and has not been moved from its deep structure position or (b) it has replaced an item that is a NP by (a) or (b).”ただし、Jimのこの定義には誤植がある。最後の部分の (a) or (b) は (a) と訂正すべき。この訂正は、Jimが1991年12月27日付で言語学科内に配布した“Notes towards a 2nd edition of *The Syntactic Phenomena of English*”と題するハンドアウトに含まれているErrataに入っていたにも関わらず、第2版の改訂作業でJimが訂正することを忘れてしまったようである。以下は筆者が理解した4基準の内容である。

(2) NP-hoodの4基準

- 構成素が意味的 (semantic) にNPであるとは、その構成素が述語 (predicate) の項 (argument) を表すときである。
- 構成素が内統語的 (internal syntactic) にNPであるとは、その構成素が代名詞1語から成るか、固有名詞1語から成るか、Det N'の形をしているときである。
- 構成素が前表層構造 (shallow structure) で外統語的 (shallow-oriented external syntactic) にNPであるとは、その構成素が前表層構造で項が典型的に現れる位置に現れる、つまり、[_s __ V']か[_v V __]か[_p P __]の位置に現れるときである。
- 構成素が深層構造で外統語的 (deep-oriented external syntactic) にNPであるとは、その構成素が深層構造で項として現れそこから移動していないか、または、その構成素が深層構造で項の位置にあった他の構成素を派生の過程で置き換えているときである。

たとえば、述語名詞句 (predicate NP) (たとえば、下の表のSophie is a lawyerにおける[_{NP} a lawyer]) は、shallow-oriented external syntacticには

NPであるが（前表層構造で[_V V __]の位置に生じるので）、deep-oriented external syntacticにはNPではない（深層構造で項として生じていないし、派生過程で項であったものを置き換えてもいないから）ということになる[192]。この4基準をもとに、Jimは次の各下線部を表のように分類した[193]。

(3) NP-hoodの4基準の適用例

	semantic	internal syntactic	external syntactic (shallow-oriented)	external syntactic (deep-oriented)
<u>That town</u> I can't stand.	+	+	-	-
That <u>John left</u> shocked us.	+	-	+	+
It shocked us <u>that John left</u> .	+	-	-	-
<u>It</u> shocked us that John left.	-	+	+	+
Sophie is <u>a lawyer</u> .	-	+	+	-
<u>A brain surgeon</u> he isn't.	-	+	-	-
<u>There</u> was a man outside.	-	- ^(c)	+	+ ^(g)
He went home <u>that day</u> .	+ ^(a)	+	(+) ^(e)	+ ^(h)
He went home <u>last Tuesday</u> .	+ ^(b)	(+) ^(d)	(+) ^(f)	+ ⁽ⁱ⁾

以下、(3)の表について筆者の理解を述べる。(a) (b) で+になっている理由は、Jimはこれらの句をゼロ前置詞[_p ∅] (2.3の末尾を参照)の補部と考えているからである。このゼロ前置詞は普通の前置詞同様に、意味的に2項述語（この場合は、イベントとその起こった時との2項）と分析する[207-8]。(c)の-は、JimはthereをNPを成すとは認めていたものの、代名詞としては認めていなかったことを示す。(なお、existential *there*はAarts 2011でもHuddleston 2022でも付加疑問文などから明らかのように、人称代名詞に分類されている。) (d)に括弧が付いているのは、ゼロ前置詞の補部NPがDetを欠いているからであろう。(e)と(f)に括弧が付いている理由は、筆者には理解できない。両者ともゼロ前置詞の

補部であり、前表層構造ではP'を成して典型的な時のP'の位置に現れているので ([684]参照)、+で良いように思えるのだが。(g) では、thereは深層構造でexistential *be*の項であったa manを置き換えているので (正確には、existential quantifierの成すQ'である $[_{Q_x} \exists a \text{ man}]$ に対応する変数 x がexistential *be*の項になっていて、その項である x をexistential quantifier相当のthereが置き換えるので) +となっている ([95, 635]、上野2022b第5節を参照)。(h) と (i) では、それぞれの下線部は深層構造からゼロ前置詞 $[_p \emptyset]$ の補部のままであるので+になっている。

このNP-hoodの概念が統語論、特に派生過程の説明の中でどの程度有効なのか、筆者には理解できない。確かに、さまざまな構成素がこれら4基準に合うかどうかによってどの程度のNPらしさを有するのかは分かる。しかし、たとえばThat John left shocked usにおける下線部とJohn's leaving shocked usにおける下線部とは、この4基準に照らすと同程度のNP-hoodを有することになるが(両者ともinternal syntacticだけが-)、本当にそうであろうか? 前者のthat節は分裂文の焦点に現れないが (Internal S Constraintの効果)、後者は現れる。また、主語助動詞倒置を伴うyes/no疑問文の場合、前者は疑問文にできないが (これもInternal S Constraintの効果)、後者はできる。このように大きく統語的性質が異なる2つの表現が、この4基準に照らすと同程度のNP-hoodになってしまう。この問題については、Rossのカテゴリ-squishに関する一連の論考 (特に、Ross 1973, 1974) を踏まえて今後考えたい。

2.2 Sについて

Jimは、Sと (Compを主要部とする) Comp'とを区別し、SはCompの補部 (つまり、 $[_{\text{Comp}'} \text{Comp S}]$ という構造) であり、意味的にはlogical categoryのpropositional nexusを表すと結論した[194]。Propositional nexusとは、その $[_s \text{NP V}]$ に含まれる指示指標、時、場所、可能世界などのすべてのparametersの値が指定されると命題 (proposition) を生じるもの

のことである[194]。一方、Comp'はその主要部Compの種類に応じて、命題、situation class、eventやfactなどを表す。したがって、Compは、propositional nexusであるSと結びついて命題やsituation classなどを生み出す“operator”であると見ることができる[194, 199]。

JimはSもfuzzy categoryであると見ていた[194]。Jimは詳しく語らなかったが、これは、Sという範疇の決定要因に(NPの場合と同様に)意味的、内統語的、(2つの)外統語的要因があり、それらをどの程度満たすかに応じてS-hoodが決まるとJimが考えていたことを意味する。したがって、さまざまなreduced S (John wants to go home. With the bus drivers on strike, we'll have to form a car pool. John made nasty remarks about Mary, and vice versa.などの下線部)がそれぞれの程度においてSということになる[194-5]。

JimはSには(統語的な)主要部が存在しないと判断した[190-1]。(ただし、[15] (8) の一か所だけ、[_s NP V']においてVが主要部であることを示唆している。)しかし、私見では、主要部Xの句をX'やXPと表すように、Sの場合にもその述部(predicate) (多くの場合V')の主要部(多くの場合V)をSの主要部と認めて、(主要部Xの句をXPと表すことにならって)主要部Xの節をXSと表す方が、統語論での記述が楽になると、筆者は考える。たとえば、動詞の成す節(動詞を主要部とする節)はVSと表すことになる。さらに、動詞の場合の語形を主要部素性として認めれば、たとえば、動詞-ing形が成す節のことをVS[-ing]と表すことができる。(JimはこれをS_{ing}と表した[396]。Jimのこの記号自体、動詞が節の主要部であることを示していると筆者には思えてならない。)さらにまた、Don't speak with your mouth full.の下線部は形容詞の成す節ASということになる。また、Jimは定形節をS⁺と表したが(この記号も、筆者には動詞が節の主要部であることを示していると思えるのだが)、これも定形動詞(V[FIN])を主要部としたVS[FIN]などと表すことができる。このような分析の詳細はUeno 2015: 6-7、上野2020: 24-7を参照。

2.3 P'について

Jimは前置詞Pを主要部とする句P'のことを、従来の呼び方prepositional phraseを破棄して、他の句の呼び方（主要部品詞名の名詞形+“phrase”）に合わせてpreposition phraseと呼んだ[xxii, 50 note 4, 195, 806]。（ただし、McCawley 1988/98ではところどころprepositional phraseという名称が残ってしまっている。）

Jimは彼が尊敬していたJespersenに倣い（多くの生成文法書や記述文法書と同様に）、NPを補部を取る従来の前置詞に加え、（従来は従属接続詞と分類された）節Sを補部を取る前置詞も認めた。たとえば、beforeやafterはNPもSも補部を取る前置詞だが、duringはNPだけ、whileはSだけを補部を取る前置詞ということになる。

しかし、このように前置詞を拡張することで、実はJimの場合には問題が起こってしまう。Jimは表層構造で（SCRとして） $[_{NP} \text{Comp}']$ を認めていたので[315]、Compが（削除や補文化標識配置の結果）顕在的に現れていない場合も $[_{NP} \text{Comp}']$ に含めることにすると、Pが補部にNPを取る場合（つまり、 $[_P \text{ P NP}]$ の場合）には実はPはSを補部取ることも（ $[_{NP} [_{\text{Comp}'} \text{ S}]]$ として）許してしまうことになる。したがって、上の区別（つまり、NPを補部取るPとSを補部取るPとを区別すること）は不可能になってしまう。このような問題を避けるためには、（深層構造では項として命題が現れるという意味で $[_{NP} \text{Comp}']$ を保つにしても）SCRとしての $[_{NP} \text{Comp}']$ は破棄する必要がある（上野2023aの第6節を参照）。これにより、Internal S Constraint [325]の説明が楽になる。また、主語節や目的語節を持つ表層構造での統語構造は、それぞれ $[_S \text{Comp}' V']$ や $[_S \text{NP} [_V \text{V Comp}']]$ となり、結果として統語構造の記述（たとえば、PSSEC[527]や主語助動詞倒置、for to補文の主語位置 ([334] note 12) の記述）が楽になる。また、SCRとしての $[_{NP} \text{Comp}']$ を破棄しないと、意味的には命題を許すが表層構造ではthat補文を許さない動詞の記述ができないことになってしまう。そのような例として、JimはMcCawley 1982 : 203 note 14に次の例を

挙げていた。

He ignored *(the fact) [_{Comp} that the law was widely violated].

What he ignored was that the law was widely violated. (ignoredの目的語は[_{NP} what])

SCR [_{NP} Comp']を破棄するということは、表層構造におけるNPは名詞と代名詞の成すNPだけということになる。しかし一方で、名詞の成すNPとthat/for節が表層構造で等位接続されて大きなNPを成すことも可能である ([332] ex8, ex9参照)。この可能性を考えると、[_{NP} Comp']をcontext-sensitiveなSCRとして残す必要があるようだ。この点はInternal S Constraintと合わせて別稿で考察する。

さらに、Jimはthe destruction of Carthageなどにおけるofは意味を持たない (“semantically empty”) 前置詞と認めた[195] (詳しくはMcCawley 1982 : 193-5参照)。したがって、このような前置詞は深層構造に現れないので、(深層構造における[_{N'} N NP]や[_{N'} N' NP]という統語構造が[_{N'} N P']や[_{N'} N' P']というSCRに合わせるために) 派生途中で前置詞が挿入される必要がある[312, 387, 404]。一方、時や場所などを表すad-Sやad-V'の付加詞P'の主要部P (たとえば、George Washington was born in 1732におけるin) は意味的に2項述語を表すと分析した。つまり、このような前置詞はeventとその場所 (ないし時) の2つの項を取る述語であり[195]、深層構造に現れる。

また、Jimは音声的にゼロの (つまり、顕在化しない) 前置詞[_P Ø]を認めていた[193, 207-8, 420, 425 note 19, 459, 683-4]。この場合のP'は意味的、外統語的には確かにP'であるが、Jimは内統語的にもP'と認めていた ([193] (16)、本稿の (3) の表の中のthat dayを参照)。

2.4 AUXについて

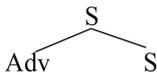
Chomsky 1957, 1965では節内の本動詞 (lexical verb, main verb) の前に並んでいる助動詞すべて (“the whole sequence of auxiliary verbs”)

をひとまとめにしてAUXと分析した。その後は、定形助動詞 (“tensed auxiliary verb”) だけをAUXとする分析も現れた。Jimの場合には助動詞はすべてその統語範疇はVであり (Jimのことを借りれば“auxiliary verbs as main verbs”[220, 572])、表層構造では補部にV'を取る動詞 ([_V V V']) として現れる[315]。Jimの分析の詳細は[215-254]と上野2022aを参照。

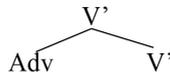
2.5 Advについて

Jimは副詞の機能に着目して、副詞が何を修飾するかに応じて、Sを修飾するAd-S、V'を修飾するAd-V'、Vそのものを修飾するAd-Vに下位分類した[197, 664]。特に、Ad-Vについては[69]を参照。Jim流のX-bar syntaxでは修飾語が付加したときには付加された統語範疇はそのままで付加構造を成すので、次のような表層構造が現れる。

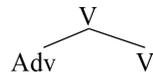
(4) Ad-Sの場合



Ad-V'の場合



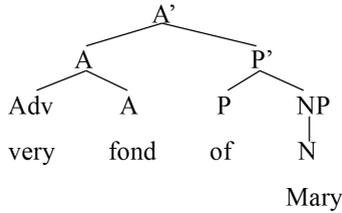
Ad-Vの場合



この構造は、Ad-Vが (want to [_V completely destroy them])のように) 不定詞の内側に現れることを正しく予測する。

Veryなどの程度副詞はV'やA'などの句全体を修飾するのではなく、その主要部のみを修飾すると考えられるので (たとえば、John is very fond of Mary and Tom is (*very) so too)、John is [_A very fond of Mary]のA'は下の統語構造になる。この場合、Jimの用語を拡張して使うと、veryはAd-Aということになる。

(5) Ad-Aの程度副詞very



Jim流の副詞分析に従えば、動詞の前に副詞が複数現れる場合には、その順序が次のようになることが正しく予測できる。(ただし、Ad-S副詞は循環変形Ad-S to ad-V'を受けている。)ただし響きの悪さは、-ly副詞が連続して並んでいることが原因と考えられる。

(6) 動詞の前に並ぶ副詞の語順Ad-S + Ad-V' + Ad-V + V

a. John probably intentionally insulted Mary.

Cf. John probably not only intentionally insulted Mary but also willingly criticized her.

What John probably did was intentionally insult Mary.

b. John intentionally deeply insulted Mary. [83 note 8]

Cf. John intentionally not only deeply insulted Mary but also severely criticized her.

What John intentionally did was deeply insult Mary.

c. ??John probably intentionally deeply insulted Mary.

Cf. John perhaps intentionally deeply insulted Mary.

形容詞から派生された-ly副詞の中には、形容詞の場合に補部を取っていたP'が形容詞が副詞にかわってもそのまま補部P'であるものが存在する。副詞がそのような補部P'を取った場合には句Adv'を成す[198]。

(7) 補部を伴うAdv'の例

- a. [_{Adv} fortunately for us] (cf. [_A fortunate for us])
- b. [_{Adv} subsequently to his arrival] (cf. [_A subsequent to his arrival])
- c. [_{Adv} independently of each other] (cf. [_A independent of each other])
- d. [_{Adv} separately from the rest] (cf. [_A separate from the rest])

2.6 Detについて

Jimは決定詞 (determiner, Det) という統語範疇を、論理範疇 (logical category) のquantifierの統語的対応物であり、NPやSと同様にfuzzy categoryを成すと捉えていた[198]。(筆者としては、Arts 2011 : 58, 108やHuddleston et al. 2022 : 29などに倣って、品詞名としてはdeterminative、NP内でdeterminativeが担う文法機能をdeterminerと呼びたい。) Detはほとんどの場合1語だけから成るのでその内統語 (internal syntax) は問題にならない。Jimが指摘するように、まれに修飾語almostやvirtuallyなどを取ることがある。この修飾語はDetに付加しており、[_{NP} [_{Det} [_{Adv} almost] [_{Det} all]] [_N American people]]という統語構造を成すと分析する。

JimはさまざまなDetについて、そのDet-hoodを次のように分析した。

(8) 3基準によるDet-hood [198]

	Semantic	External-syntactic (shallow-oriented)	External-syntactic (deep-oriented)
All pastry is fattening.	+	+	+ ^(d)
The boys have <u>all</u> gone home.	+	- ^(b)	- ^(e)
Iraq's attack on Kuwait	-	+ ^(c)	+ ^(f)
Sophie is <u>a</u> lawyer.	- ^(a)	+	- ^(g)

[192]のNP-hoodの場合を参考にして、内統語的基準以外の3基準を筆者なりに次のように定義してみた。ただし、External-syntactic (deep-oriented)なDetについては、どのように定義すれば上の表で丸で囲んだ(d)と(e)のようになるのか、筆者にはさっぱり理解できない。((d)のallも

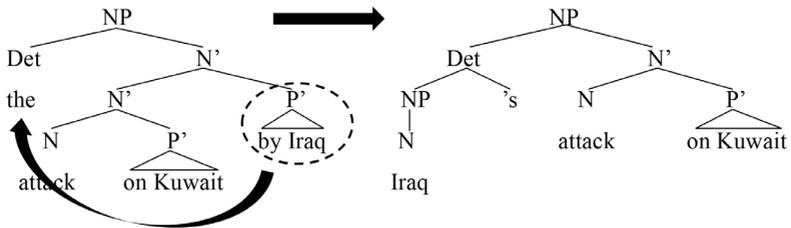
(e) のallもともに、深層構造ではQ'の主要部Qである。)

(9) Det-hoodのための3基準

- SemanticなDet： 当該表現が意味的にquantifierである。
- External-syntactic (shallow-oriented) なDet： 当該表現が前表層構造でN'を伴ってNPを成す、つまり、前表層構造で $[_{NP} \text{ Det } N']$ という構造のDetの位置に現れる。
- External-syntactic (deep-oriented) なDet： ????

JimはDet位置にある所有格NPについては、(10) の派生を考えていた [199, 402]。この変形をJimはArticle Replacementと呼んだ[402]。ただし、下の例で名詞attackは動詞attackからの名詞化変形 (nominalization) で派生されたもので、前置詞onとbyは派生過程で挿入されたものであると仮定する ([410] (13)、[417] (25) などを参照)。

(10) Article Replacement



右側の表層構造において、 $[_{Det} \text{ NP } 's]$ の構造はNP'sがDetとして機能しているという理解になる。したがって、前述したように、統語範疇としてのdeterminativeと文法機能としてのdeterminerとを分けて、この場合「NP'sがdeterminerとして機能している」と言うことにする。文法機能(主語や目的語)はこれまでJimの樹形図には表示されてこなかった事実に鑑み、筆者としてはこの場合のNPのSCRを $[_{NP} \text{ NP}'s \text{ N}']$ として、 $[_{NP} \text{ Det } N']$ とは

異なるSCRとして扱いたい。

(8)の表について、筆者の理解を述べる。述語名詞に付いた(a)の不定冠詞は深層構造に存在しないとJimは考えていた。Predicate NPの冠詞は“semantically empty”なので深層構造には存在せず、派生過程でSCR_[NP Det N']に合わせるために挿入されるとJimは分析した[442]。(b)の-は、allがV'付加詞であり_[NP Det N']のDetの位置に存在していないからである。(c)の+は、Iraq'sが_[NP Det N']のDetの位置に存在しているからである。前述したように、(d)と(e)については、筆者には理解できない。(f)の+は、Iraq'sがQである定冠詞theを置き換えているからであろう。(g)の-は、不定冠詞が深層構造に存在していないからであると考えられる。

2.7 Pronounについて

JimはMcCawley 1998の中では、人称代名詞を一貫して内部構造のないNP(たとえば_[NP he])と分析している[xii, 201]。(この分析は、人称代名詞がNP主要部の名詞であることを否定している点に注意。)人称代名詞をNPという統語範疇にした理由は、おそらく、人称代名詞はNPを先行詞とするので意味的にNPであり、また_[NP Det N']と同じ位置に現れる(つまり、NPを置き換える)ので外統語的にもNPであるからであろう。Jimは人称代名詞について、次のように述べている[201]。

“The widespread belief that English personal pronouns are nouns is not supported by any evidence that I am aware of; personal pronouns are accordingly treated here as NPs having no internal structure.”

では、Jimは(11)のような例をどのように考えていたのだろうか? 筆者には、このような例は人称代名詞が名詞であることを示してるように思えてならない。(実際、Aarts 2011: 44やHuddleston et al. 2022: 28などでは、代名詞を名詞に含めている。)ただし、決定詞や形容詞を伴った名詞

用法の人称代名詞のほとんどが対格で現れる点は興味深い。

(11) 人称代名詞の名詞用法 (下線部; a-cでは対格、dでは主格)

- a. [_{NP} What [_{NP} a stupid me]]!
- b. You remind me of [_{NP} a young me].
- c. Remember, love is always a two-way communication. It takes two, a happy you and a happy him or her to complete the equation. (ネットから採取)
- d. My reveries tend often to be concerned with my long past youth. I have done various things I regret, but I make an effort not to let them fret me; I say to myself that it is not I who did them, but the different I that I was then. (Somerset Maugham *A Writer's Notebook*)

JimはPostal 1966をもとに、人称代名詞とDetとは同一品詞であると考えていた[202, 470-1]。すなわち、単独で使われれば人称代名詞で(この場合は人称代名詞が単独でNPを成すという統語構造、たとえば[_{NP} you])、一方、人称代名詞がN'の前で使われればDetということになる(この場合の統語構造は[_{NP} [_{Det} you] [_{N'} first-year students]])。つまり、人称代名詞とDetとは位置的変異 (positional variant) と考えた[471]。(たとえば、定冠詞theはDetに使われた3人称代名詞の異形態であるとする[471]。) さらに、JimはこのことからDet付きのNPの主要部はDetであると示唆している[202, 486 note 37]。つまり、決定詞付き名詞句の統語範疇はNPではなく、決定詞句Det'ということになる。(もともとPostal 1966やHudson 1976では、Abney 1987のDP分析以前にすでにDetがNPの主要部であると分析されていた。) しかし、このNPのDet'分析は、Jimはその可能性を論じたのみで、McCawley 1993でも1988/98でも実際の分析には使わなかった。実際、Jimは[202]で“No position is taken in this book on the controversial issue of whether the Det or the N is the head of a [_{NP} Det N']

constituent.”と述べている。参考までに、仮にDet'分析を使うと次のような統語構造になる。

(12) Det'分析の例

[_{Det'} [_{Det} They]] have no respect for [_{Det'} [_{Det} us] [_{N'} linguists]].

[_{Det'} [_{Det} You] [_{N'} people who are standing in the aisles]] should sit over here.

第3節 tree pruningについて

これまでの筆者の論考(「James D. McCawleyの統語分析」(1)から(7)まで)では、tree pruningを仮定する多くのアプローチがそうであるように、派生の各段階で機能しなくなった節点をその都度削除するという方針でtree pruningを適用してきた。(具体的には、それぞれのcyclic outputに対してtree pruningが適用されると想定してきた。)しかし、これには次の問題点がある。すなわち、統語範疇の節点がどのような場合に「機能しなくなった(“nonfunctional”)」と言えるのが明確になっていない。

しかし、第2節で述べたような、統語範疇決定にあたっていくつかの基準を適用するというJimの分析を踏まえれば、当該の節点が「機能しなくなった」と言えるのかどうかについてこれまでよりも明確に答えることができる可能性がある[205]。

たとえば、何らかの理由で(たとえばRaisingやEquiで)Sがその主語NPを失った場合を考えてみる。このSはinternal syntacticにはS-hoodを失うが、external syntacticやsemanticの観点からはS-hoodを保っていると考えられる。したがって、この場合には、Sのinternal syntacticな側面に関係する統語現象に対しては、この主語を失ったSはSとして振舞わないが、Sのsemanticな、また、external syntacticな側面に関わる統語現象に対しては依然としてSとして振舞うはずである[205]。さらに、一般的にどんな構成素でも変形の適用によりそのinternal syntactic、external syntacticな側面で影響を被ったとしてもsemanticな側面は影響を受けるはずがないので、

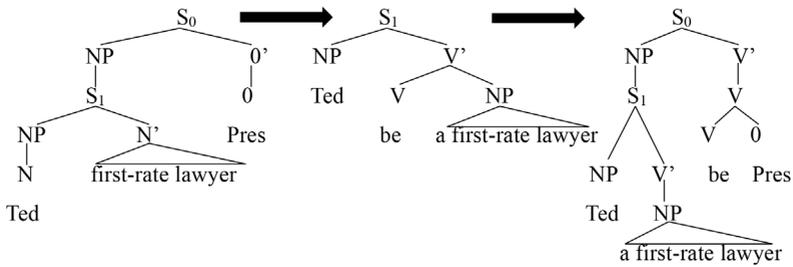
その構成素の統語範疇はsemanticな側面に限ればそのままであると言える[205]。これから分かるように、Jimの基準に基づけば、統語範疇が完全にnonfunctionalになるということはないという結論になる。

Jimは句X'の主要部Xに派生過程で影響が出る場合について、5つの場合に分けて考察している[206-9]。(ただし、第二の場合と第五の場合の一部とが重複している。)

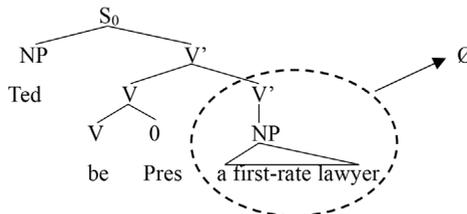
- 第一は、主要部が派生過程で他の統語範疇の主要部に置き換わる場合。たとえば、 $[_0 \text{ Past}]$ がTense Replacementにより $[_V \text{ have}]$ に置き換わり、それに伴って $0'$ は V' に変わることになる。
- 第二は、主要部が削除されて現れなくなる場合。たとえば、深層構造に存在していた $[_{\text{Comp}} \text{ that}]$ が削除された場合、Comp節点を失うのはもちろんだが、その母節点であるComp'はどうなるのであろうか?このようなComp'はinternal syntacticにはComp'-hoodを失うが、semanticな側面とexternal syntacticな側面ではComp'-hoodを保っていると考えられる。たとえば、形容詞補部のP'の場合、thatを失ったComp'でも、やはり直前に前置詞があればその前置詞を削除しなければならないし、もちろんInternal S Constraintにもかかる。
- 第三は、主要部は存在するが音声的にゼロである場合。たとえば、ゼロ前置詞 $[_P \ \emptyset]$ の例がある。この場合には、Jimが様々なテストで示したように、表層構造で $[_P \ [_P \ \emptyset] \text{ NP}]$ の構造が保たれていると考えられる[207-8, 214 note 25, 425 note 19, 483]。
- 第四は、主要部が他の語の一部として編入(incorporation)される場合。これには、 $[_{\text{Comp}} \text{ 's -ing}]$ に対する補文標識配置も含まれる。テンスがATやTHで動詞本体と一体化する場合もこれに含まれるであろう。
- 第五は、句の主要部がその句から抜き出されるか(extraction)(多くの場合には、上位の主要部に移動する)、または、主要部が削除される場合(上の第二の場合)。このようなとき、Jimは“the head of a constituent remains its head even if it is deleted or extracted”と分析した[209]。

しかし、私見では、この第五の場合には「主要部は失うが、その句の節点とラベルは保たれる」とJimは結論すべきであったと考える。V' deletionがNPに適応される例としてJimが示した例[209] (17)は、ATの適用のし方を間違えている。このままでは、厳密循環適用原則に違反してしまう。次のように訂正すべきである ([234-5]、上野2021第4節を参照)。

(13) Alice is a first-rate lawyer, and Ted is too.における第二等位節の派生 (訂正版)



- S₁を領域としてbe挿入と不定冠詞挿入がかかる。
- S₀を領域としてATがかかり、[_v be]が[₀ Pres]に引き寄せられる。この際、主要部Vを失ったV'の節点はV'のまま残ると分析する。次いでE+Rが適用される。その後、第一等位節の[_v [_{NP} a first-lawyer]]を先行詞としてV' deletionがかかる。



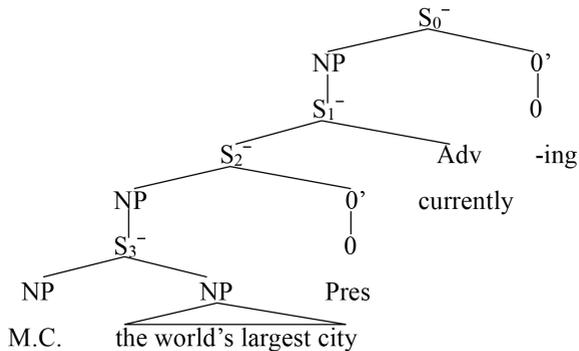
同様にbe削除の場合にも、主要部の[_v be]は削除されても、その母節点のV'は残ると分析することにする。たとえば、(14)のwithを使った絶対構文では、述語NPがAd-S副詞で修飾されている。

(14) withによる絶対構文の例 [209]

With [_S Mexico City currently the world's largest city], I'm surprised that your company doesn't have an office there.

この例では、派生の途中で副詞currentlyが修飾していたV'の主要部のbeingが削除されるわけだが、削除後も[_V being]の母節点のV'は残ると考えることにする。したがって、表層構造は[_S Mexico City [_V currently [_V [_{NP} the world's largest city]]]]となる。この表層構造では、副詞currentlyはV'付加詞のまま、通常のSCR [_V Adv V']を満たしている。このwithの補部になっているSの深層構造は(15)であると考えられる。ただし、Jimの場合には[_{Comp} -ing]を設定するが、ここでは本稿の方針に従って[₀ -ing]を設定する(上野2023aの第4節、第6節を参照)。

(15) (14) のwithの補部Sの派生



派生は次のように進む。

- S₃を領域として、be挿入がかかる。(ここでbeを挿入しておかないと、S₀の領域で[₀ -ing]が降りて行ったときにこの接辞が付く対象が存在しなくなり、派生は破綻する。)
- S₂を領域として、E+Rがかかり[_S M.C. [₀ Pres [_V be [_{NP} the world's largest city]]]]に至る。次いで、Tense ReplacementによりPresが削除(こ

の点については上野2021の(9)を参照)。

- S₁を領域として、Ad-S to Ad-V'がかかり[S M.C. [V_r currently [V_r be [NP the world's largest city]]]]に至る。
- S₀を領域として、[₀ -ing]が[V_r be]に降りて一体化し[S M.C. [V_r currently [V_r being [NP the world's largest city]]]]に至る。最後に[V_r being]が削除されるが、その際に母節点のV'を残すと分析する。表層構造[S M.C. [V_r currently [V_r [NP the world's largest city]]]]に至る。

第4節 深層構造について

この節では、McCawley 1988/98における深層構造について筆者の私見を述べる。30歳代前半(つまり、生成意味論時代)のJimにとって、深層構造は「生成意味論 (generative semantics)」の考え方に基づいて、文の意味構造 (semantic structure) そのものを表示するものであった (McCawley 1973/76 : 92, 105, 123, 139, 155などを参照)。(なお、Jimは“generative semantics”という名称をmisnomerとして嫌っていた。たとえば、Newmeyerの*Linguistic Theory in America*の初版と第2版のJimによる手厳しい書評やMcCawley 1982 : 1を参照。) Jimは少なくとも1970年代末までは“the deepest level of syntactic derivations is identical to logical structure” (McCawley 1982 : 185) と考えていたようである。

確かに、McCawley 1988/98ではその深層構造に意味的要素 (Q', [₀ T], Unspecなど) がごくわずか使われている。また、語彙分解 (lexical decomposition) がごく少数ではあるが、名詞化深層構造や使役化におけるACTIONやCAUSEなどで使われている[410, 438, 590, 685]。しかしながら、McCawley 1988/1998における深層構造はそのほとんどが統語範疇で構成されている。つまり、晩年のJimの深層構造は意味・論理構造にもっとも近い統語構造であるという位置づけになっている[38-9, 344]。つまり、McCawley 1988/98における深層構造はあくまでももっともよく意味・論理構造を反映した統語構造であって、意味・論理構造そのものでは

ない。実際、統語範疇を決定する要因として、“semantic”な要因とは別に“deep-oriented external syntactic”な要因を設けていたことから[192]、深層構造は統語範疇で構成されているということが伺える。また、[39]での“a close match between deep syntactic structure and semantic structure”、[344, 645]などでの“deep structures are approximate semantic structures”という記述からもこの点が伺える。

Jimは深層構造（特に、その意味的構成素）を調べる手段として、essential AD（たとえば人称代名詞）の先行詞、変形の適用領域(domain)、funny NPs (idiom chunks, ambient *it*, existential *there*) やquantifierとその束縛変数 (bound variable) の分布を挙げている[73-81]。

- essential ADは深層構造にすでに存在しているanaphoric device (AD) で、深層構造における構成素を先行詞とする[343-4]。
- 変形（特に主語変更を伴う受動化、there挿入、Quantifier-float、外置、tough移動）([85-110]参照) が適用されている場合には、その変形の適用以前に変形の適用領域としてのS節点が存在していたことが分かる。
- funny NPとそれを認可する表現とは深層構造において同一のS内に現れていなければならない。ただし、there挿入の場合には、その適用時点で主語の位置にある束縛変数と認可する動詞とが同一のS内に現れていなければならない[95, 635]。
- quantifierとその束縛変数については[80]、“The scope of a quantifier must contain all instances of the variable in deep structure that the quantifier binds.”と述べている。ただし、scopeは深層構造においてquantifierの成すQ’の姉妹のS節点のことである[580]。詳しくは上野2022b参照。

なお、JimはMcCawley 1988/98で繰り返しlogical structureという用語を使っている[たとえば80, 198, 199, 369, 533, 585, 634, 636, 652など]。これは（命題に相当する）Sの外側にquantifier（つまりJimのQ’）が現れた構造に対して用いられている。不思議なことに、McCawley 1988/98の

indexにはlogical structureやlogical formという用語が挙げられていない。また、semantic structureという用語も繰り返し使われているにも関わらず[たとえば36, 38, 39, 57, 188, 344, 349, 526, 645など]、これもindexには挙げられていない。

もし深層構造が完全な意味・論理構造であるならば、McCawley 1993のように、深層構造はProp, Arg, Predなどの意味・論理範疇で書かれていなければならないはずである。しかし、もし深層構造が純粹に意味・論理範疇で構成された場合を考えると、変形適用の際に問題が生じる。なぜならば、McCawley 1988/98における変形の入力 (Structural Description, SD) と出力 (Structural Change, SC) とはともに統語範疇を伴った樹形図であるために、意味・論理範疇で書かれた深層構造には変形がかからないということになってしまう。これを避けるために、深層構造における統語範疇記号はそれに対応する意味・論理範疇を表すという但し書き付きで、深層構造を解釈することもできようが、それでは統語範疇と意味・論理範疇とを本質的に同一視することになってしまい好ましくない。

このような問題を避けつつ、統語論の中で意味・論理構造と表層統語構造とを合わせて語り、両者の構造を変形による派生で繋ぐというJimの「生成意味論」的精神を生かそうと思えば、考えられる方針として、表層統語構造と意味・論理構造を完全に分離させて (つまり、両者を異なるモジュールないし部門として扱い)、表層統語構造は100%統語範疇から構成されるようにし、意味・論理構造は100%意味・論理範疇から構成されるようにし、両者の関係を構成素間の対応関係として捉えるという道がある。(もちろん個々の語彙のレキシコンへの登録では、各語彙項目の表層統語情報と意味・論理情報とを併記することになり、この2種類の情報が表層統語構造と意味・論理構造とを繋ぐインターフェースの土台となる。) 具体的には、表層統語構造はMcCawley 1998に倣い、意味・論理構造 (つまり、JerryのF/A構造) はMcCawley 1993の論理構造に倣う。Automodular Grammar (AMG) の枠組みを使ったJerrold Sadock 2012 (や

その後のUeno 2014, 2015) はこれを実際に実行したものであると、筆者は理解している。見方を変えれば、Jimが理念的に意味・論理構造から表層構造へと直列に配置し変形による派生 (derivation) で繋いだ2種類の構造を、JerryのAMGでは並列に配置しそれぞれの構成素間の対応関係 (correspondence) で両者の関係を捉え、その結果、Jerryは派生と変形という概念を統語論から取り除いたと言える。

Jerryのアプローチのさらなる強みは、意味を2つのモジュールに分けたことである。命題 (PROP) や項 (ARG) などの論理的意思を捉えるF/A構造 (LFGのf構造に近いもの) と、事象 (event) や意味枠割 (semantic role) などの概念的意味を捉えるRole構造 (Ueno 2015と上野2020のE/R構造のことで、JackendoffのLCS構造に近いもの) である。Ueno 2014, 2015や上野2020では、さらに踏み込んでE/R構造内に抽象的な発話行為 (speech act) のレベルを構成することで、発話行為や語用論に関わる現象が明示的に説明できるようになった。さらに、若い時分のJimをはじめ多くの「生成意味論」研究者が盛んに用いた語彙分解は、おそらくAMGのE/Rモジュールの中で生き残ることが可能になり、このE/R構造と統語構造とのインターフェースが (E/R構造から読み取れる) 意味役割を明示した項構造 (argument structure) になるのであろうと、筆者は現在考えている。(この点については、上野2023b第2節の項構造とoutrankについての議論を参照。) これにより、60年代後半から70年代前半にかけて隆盛を極めた「生成意味論」の研究成果をAMGの枠組みに自然に取り込むことができる見通しである。

最後に統語範疇の素性分解についてごく手短かに触れておきたい。語彙範疇の集合{N, V, A, P}の要素である4品詞を素性[±N]と[±V]を使って分解するという考え方がある (Chomsky 1972)。この素性分解の問題点は、第一に、どの2つの要素から成る部分集合も必ずnatural clusterになってしまう点と、第二に、3つの要素から成るどの部分集合も決してnatural clusterにはならないことを予測してしまう点 (たとえば、ドイツ語の格付

与能力はV, P, Aの3品詞にまたがっているという事実などが捉えられない)にある。もちろんこの素性分析はJimの統語範疇の考え方とは相容れないものである。

まとめ

本稿では、McCawley 1988/98の統語範疇に関する第7章の内容について私見を交えつつ検討し、それぞれの節で筆者の理解を基に問題(と思われる点)を指摘した。第1節では、Jimによる統語範疇決定要因とJimの統語範疇の捉え方を検討した。第2節では、Jimによる個々の統語範疇を巡る議論を検討した。第3節では、派生過程で使うtree pruningについて、Jimの捉え方を検討した。第4節では、Jimの深層構造についての問題点を検討し、JerryのAutomodular Grammar (AMG)によればその問題点が克服できる点を指摘した。さらに、AMGのさらなる展開の見通しについて筆者の私見を述べた。

参考文献

- Aarts, Bas. (2011) *Oxford Modern English Grammar*. Oxford University Press.
- Abney, Stephen. 1987. The English noun phrase in its sentential aspect. Ph.D. thesis, MIT.
- Chomsky, Noam A. (1957) *Syntactic Structures*. Mouton.
- Chomsky, Noam A. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press.
- Chomsky, Noam A. (1972) *Studies on Semantics in Generative Grammar*. Mouton.
- Emonds, Joseph (1970) Root and Structure-preserving Transformations. Ph.D. thesis, MIT.
- Emonds, Joseph (1976) *A Transformational Approach to English Syntax*. Academic Press.
- Huddleston, et al. (2022) *A Student's Introduction to English Grammar*. Cambridge University Press.
- Hudson, Richard A. (1976) *Arguments for a Non-Transformational Grammar*. University of Chicago Press.
- McCawley, James D. (1973/1976) *Grammar and Meaning*. Corrected edition in 1976. Taishukan Publishing Company and Academic Press.
- McCawley, James D. (1982) *Thirty Million Theories of Grammar*. University of Chicago Press.
- McCawley, James D. (1988) *The Syntactic Phenomena of English*. University of Chicago Press.

- McCawley, James D. (1993) *Everything that Linguists have Always Wanted to Know about Logic* *but were ashamed to ask*. Second edition. University of Chicago Press. (初版は1981年)
- McCawley, James D. (1998) *The Syntactic Phenomena of English*. Second edition. University of Chicago Press.
- Postal, Paul M. (1966) On so-called “pronouns” in English. *Georgetown University Monograph Series on Languages and Linguistics* 19 : 177-206.
- Ross, John Robert. (1973) Nouniness. In Fujimura ed., *Three Dimensions of Linguistic Theory*, TEC, 137-257.
- Ross, John Robert. (1974) Three batons for cognitive psychology. In Weimer and Palermo eds., *Cognition and the Symbolic Processes*, Earlbaum, 63-124.
- Sadock, Jerrold M. (2012) *The Modular Architecture of Grammar*. Cambridge University Press.
- Ueno, Yoshio (2014) *An Automodular View of English Grammar*. Waseda University Press.
- Ueno, Yoshio (2015) *An Automodular View of Ellipsis*. Waseda University Press.
- 上野義雄 (2020) 『意味の文法』 早稲田大学出版.
- 上野義雄 (2021) 「James D. McCawleyの統語分析 (2) —テンスを検討する—」『白鷗大学教育論集』第15巻第2号
- 上野義雄 (2022a) 「James D. McCawleyの統語分析 (3) —助動詞を検討する—」『白鷗大学論集』第36巻第2号
- 上野義雄 (2022b) 「James D. McCawleyの統語分析 (5) —数量詞繰り下げを検討する—」『白鷗大学教育論集』第37巻第1号
- 上野義雄 (2023a) 「James D. McCawleyの統語分析 (6) —補文構造を検討する—」『白鷗大学教育論集』第17巻第1号
- 上野義雄 (2023b) 「James D. McCawleyの統語分析 (9) —照応表現を検討する—」『白鷗大学論集』第38巻第1号

